

## 世界No.1技術をコアとした 優れた商品群の創出

上席常務

東 実



世界経済はアメリカや中国を中心にして堅調に推移し、日本経済も懸念材料はあるものの、設備投資や輸出の増加により成長過程に入ったと報じられています。東芝グループは、「安定と成長を兼ね備えた高収益事業グループ」を目指して、2003年度は企業合併、分社そして社内カンパニーの再編など、大幅な構造改革を行いました。この新体制をベースに成長戦略を実行していく所存です。成長は優れた商品群やサービスなどの事業がもたらしますが、それらの根源は技術です。過去を振り返っても、電気釜、日本語ワードプロセッサ、DVDなど、東芝の革新的技術が時代のパラダイムを変える商品を生んできました。革新的技術は唐突に生まれることはほとんどなく、コアとなる世界No.1技術が底流にあることを共通認識として持ちたいと思います。

ここ数年のIT(情報技術)の進展により、デジタル・モバイル・ネットワーク化があらゆる局面で浸透し、ユビキタス社会の到来が確かなものとなってきました。具体的には、インターネット回線のブロードバンド化、放送の完全デジタル化、携帯電話の多機能・高性能化が実現されつつあります。ユビキタスをけん引する技術は、無線・ネットワーク、ヒューマンインタフェース、映像、セキュリティ、システムLSI、ストレージなど多岐にわたりますが、更に一歩進めて、人間が求める安心、快適、感動を具現化するヒューマンセントリックな技術が必須となるでしょう。これらの技術は、デジタルプロダクツ及び部品事業に新たな市場と優れた商品群をもたらすものと期待されます。

一方、継続的な省エネルギーと環境負荷低減への社会的要請は年々増大しています。東芝グループは、プラントの性能向上や運用・保守の高度化などシステム関連技術のほか、将来の水素エネルギー社会も視野に入れた環境・省エネルギー関連技術の開発を推進しています。これらの技術は、安定的な収益構造を目指す社会インフラ事業の強化につながるものと確信しています。

2003年の技術成果のポイントは、以下のとおりです。

まずデジタルプロダクツ分野では、テレビに映せるCDMA(Code Division Multiple Access)方式の携帯電話、DVDとHDDを一体化した3種類の記録が可能なレコーダ、当社独自の画質技術を採用した薄型カラーテレビ、使う人の「快適さ(Comfort)」の実現をコンセプトとしたパソコンを製品化しました。将来技術としては、ユビキタス環境を実現するモバイル機器用小型燃料電池、小型高性能アンテナ、画像や音声認識機能を持った情報家電用ロボットのコンセプトモデルを開発しました。電子デバイス・材料分野では、65 nmのプロセス加工技術を用いた低消費電力LSI、NAND型フラッシュメモリの新メモセル技術、青紫色半導体レーザなどを開発しました。また、社会インフラ分野では、レーザ応用予防保全技術、火力発電所のリモート監視 & 診断サービス、新型顔認識FacePass™、車載画像認識プロセッサVisconti™などを事業化するとともに、電子投票システム、電子文書管理システムなどのソリューションを開発しました。

これらの技術成果は、権威ある社外諸機関からご評価いただき、2003年度も5年連続の紫綬褒賞、全国発明表彰(文部科学大臣賞)、電気科学技術奨励賞(文部科学大臣賞)、本田賞、市村産業賞など、数々の賞を受けました。

以上、東芝グループにおける技術開発の成果の一端を紹介いたしました。具体的な内容は本文をご一読いただき、きたんのないご意見、ご助言をお寄せいただきますよう、心からお願い申し上げます。